スキポール空港
～オランダ・ベルギーの旅⑤～

福岡空港発アムステルダム行き直行便、到着空港はヨーロッパの空の玄関口の一つ、オランダ最大の国際空港・スキポール空港である。

この空港の名前を知ったのは最近のことだ。七月十七日、乗客・乗員二百九十八人を乗せたマレーシア航空機はスキポール空港を飛び立ち、クアラルンプールに向かう途中、ウクライナ上空でミサイルによって撃墜され、全員が死亡した。この事件は日本でも大きく報道され、スキポール空港という名前を初めて知ったのである。

オランダを表現した言葉に「世界は神がつくり給うたが、オランダだけはオランダ人がつくった」というものがある。

オランダは九州ぐらいの面積だが、その多くが干拓によって誕生した。スキポール空港一帯も昔は湖や沼地で強い海風が吹いていた。スキポールとは「羊の地獄」という意味だそうで、この地は羊にとっては地獄のような土地だったらしい。

一八四八年に始まったこの地の干拓事業は広大な干拓地造成とともに首都アムステルダムの防衛のためのもので、総延長百三十六キロにも及ぶ要塞堤防があり、スキポール要塞とも呼ばれる。今は「アムステルダムのディフェンス・ライン」として世界遺産になっている。

運河は重要な観光資源

スキポール空港をはじめオランダの国土のかなりの部分が海抜以下の低さというから驚く。運河が多い理由もわかる。

さて、スキポール発のマレーシア航空機の事件で百九十五人のオランダ人が犠牲になった。遺体の多くがスキポール空港に運ばれ、スキポールは羊の地獄ならぬ、悲しみと怒りの場となった。

あれから一カ月半後、私はスキポール空港に立った。空港には事件を思い起こさせるものは何もなく、遺族以外の人々にはもう風化しているように思われた。

この事件をはじめ、個人ではどうすることもできない事件で命を失うことが多い。旅に出る前に起きた広島の大雨災害、先日の御嶽山の火山爆発、こんな時、つい神はおられるのかと疑問を持つ。洗礼を受ける前、公教要理というカトリックの勉強で「神が全知全能ならベトナムの戦争を神は止めさせるべき」と神父と論争したことを思い出す。そして、いまだに信仰とは何かと自分に問いかけることが多い。

今回のオランダ・ベルギーの旅は衝動的に申し込み、事前の準備はほとんど何もできなかった。唯一つ、司馬遼太郎の「オランダ紀行」を読んだぐらいだ。それでも大いに役立った。

スキポール、羊の地獄をオランダ人は人が生きる土地に変えた。そのことがいろいろな形で今のオランダの特徴になっている。そうだ、私にも変えるべきものがたくさんある。信仰も与えられるだけでなく、自分で育むものでもあると思う。

旅に出る前に読んだ本